
オレの才能は捨てたもんじゃない。

富士の岡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オレの才能は捨てたもんじゃない。

【Nコード】

N5465Y

【作者名】

富士の岡

【あらすじ】

子供の頃から嫌な事があるとその場から逃げることが当たり前になっていた杉村千太郎は、高校の入学式に一年先輩である高浦しぐれから質問（強制）をされる。

千太郎の高校デビューは成功するのか！

本人はする気ないと思うけど。

入学式の朝（前書き）

主人公	・杉村千太郎
妹	・杉村真奈美
ヒロイン	・高浦しづれ
ヒロイン父	・高浦しろう
主人公父	・杉村太郎
主人公母	・杉村美琴
担任の先生	・西崎さつき
先生男	・夏目次郎

今のところ、こんな感じです。

初投稿作品です。あったかい目で広い心で読んでみてください。

入学式の朝

幼い頃のオレは、嫌なことからは逃げ出すのが一番の対処法だと思っていた。実際に逃げ出すことで嫌な思いも嫌な目にもあつていない。

だけどオレの高校生活の登校初日は、逃げる選択しを与えてはくれなかった。

登校初日の朝、オレは布団の上であと10分だけと、二度寝モードに入ろうとしていた。

眠りにつくかつかないくらいの絶妙なタイミングで階段を上っていく音が聞こえて来る。

ガチャン。

部屋のドアが空いて人の気配が迫って来るのを感じた。

「ああゝもうすこし寝たっかなあゝ」

小声でつぶやきその時を待った。布団に手がかかり、いつきにガバツと布団を剥がされる。

「いい加減にしなよ。今日から高校生でしょう。このダメ兄。」

格下の者を見る目でオレを見下ろしてるのは

妹の真奈美である。真奈美はオレと二歳も歳が離れているのに同じ遺伝子で出来ているとは思えないほどしっかりしている。ルックス

は可愛いほづだと思う。

当時、中学三年生だったオレは真奈美が下駄箱から束になったらブレターをわずかみにしてゴミ箱に捨てているのを見かけたことがある。

ラブレターを捨てる時に放った言葉があまりにも酷かったのでよく覚えている。

「何このゴミ、新手のイジメかしら？キモッ」

そう言って何事も無かったように下校していったのだ。

オレは仕方なくベッドから起きる、起きるしかないよ。ダメ兄って言葉がけっこう傷つくんだよねあゝ。

「真奈美、ダメ兄って言うのやめてよ。」

「はあゝ、だったら今何時何分か確認したら」

「え？」

時計の針は9時5分を指していた。

「うあああああ、遅刻だあああ、」

慌ててベッドから飛び降りて服を脱ぐ、

「何でもっと早く起こしてくれなかったんだよ」

返事がない。真奈美の方を見たらオレのオレの足下？いや、もう

ちょっと上の方を見ているような。

「ん？何見て…っ！」

自分がどんな状況か理解した。

「あっああ…こ…これは整理現象なんだからね」

手で股間を隠しながら、まえのめりになる。

ひどい格好だよ。真奈美はまた格下の者を見るような目で見る。

「最っ低！このゴミ兄！」

真奈美は最上級アニキ罵り用語のゴミ兄をいい放ってボクの部屋を出ていった。

「ゴミって…」

朝からひどく落ち込んでしまった。

オレはあの時捨てられたラブレターを思いだしながら一階のリビングに向かった。

父さんと母さんは共働きなので家にいることは滅多にない。オレはこんな感じなんで朝食を作るのは真奈美にまかせてある。

「なあ真奈美、オレは遅刻だけど真奈美は大丈夫なのか？」

「今日は学校が休みなの。」

「え？じゃあ、オレも休み？」

「バカじゃないの！兄さんは入学式でしょ。はやく行きなよ。」

オレは追い出されるように家を出た。

学校に怒られに行くのかと思うと気がおもい、しかも初めて会う先生に怒られるのかあゝ。

家から学校までは歩いて20分くらいでつく、途中にお寺があるのだが、そこを抜ければ近道ができる。子供の頃よく遊んだ場所なので覚えていた。

お寺の前を歩いて、なにか遅刻した理由がほしいよなー、とあごに手を当て考えていると、前の方で庭掃除をしていた住職さんが声をかけてきた。

「学生さん、おはよう。」

「おはようございます。」

やけにニコニコしている。そのまま通りすぎようとしたが、住職さんはさらに声をかけてきた。

「あんた、杉村千太郎君かい？」

「は…はい、杉村ですけど。」

この辺で杉村という名字は家だけだからたぶん父さんの知り合いだろうと思い軽い挨拶ですませるつもりだった。

「よろしく頼むね。」

「よろしく願います」

ん？なんかおかしかったぞ。

「あのー頼むって何をですか？」

その時住職さんは、ハッ！として何か考え込んでから、なんでもないよーと言ってお寺の中に入って行ってしまった。

「なんだ？」

訳がわからなかった。頼むねって何をだ？

考えても仕方がないと思い、遅刻した言い訳も思いつかずに学校につくと何か騒がしいことになっていた。

体育館の方で声がするけど何だ？

校門の近くで1人していると、ジャージ姿の髭ずらがこっちに向かってくる。さっそく怒られるのかと思っていたが、

「お前…一年生？」

「はい」

「もしかして、杉村千太郎？」

「はい」

答えた瞬間、手をつかまれ

「ここにいたぞー！」

いきなり大声をだし、遠くにいる先生の集団を呼び寄せた。

「お前か！杉村千太郎は！ちょっと来い。」

オレはされるがままに、生徒指導室に連れていかれた。

入学式の朝（後書き）

作者より、

定期的には投稿出来ませんが、なるべく続けて投稿しようと思
います。

読んでいただいております。

ヤンデレとペリ髭

オレは今、生徒指導室にいる。登校初日で生徒指導ってどうよ？
と思っただらおかしくなってきた。ニヤニヤと笑ってしまった。

「お前けっこう余裕あるな」

パイプイスに座っている髭ジャァーが呆れながらこっちを見ている。

髭ジャァーって言うのは、オレがさっきつけたあだ名だ。髭とジャァーで髭ジャァーだ。

「あの、何でオレの名前わかったんですか？」

「ああ、ちょっとな。…うちの学校にもな、問題児がいるんだよ。
お前…心当たらないか？」

問題児ってわかってるってことは、オレの先輩ってことが、なおさら心当たりがないぞ。

「ないですね。」

「正直にだ。」

髭ジャァーは膝に肘を置いて前かがみになり疑いの目を向けてきた。

「ないですよ。これっぽっちも。」

「はあ…向こうはお前の名前を叫びながら入学式に乗り込んできた

んだぞ。」

ええー！うそだろ！ピンポイントでオレかよ！どんなヤンキーだよ入学式に乗り込んでくるなんて！面倒ごとはごめんだよ。

「でも、本当に心当たりがないんですけど」

髭ジャーは少し考え込んでから、はあくため息をついた。

「そうか、じゃあもう自分の教室行つていいぞ」

おいおい！問題児はどうした！オレの身の安全は保証されてるんだろうな？

「あのーそれで問題児の方は大丈夫何ですか？急に襲われたりしませんか？」

「ああ、今は落ち着いてるってよ、元々ものわりはいい方だからなあいつは、わかつたらはやく教室に行け」

少なくとも廊下を歩いているときにいきなり襲われるってことは、無さそうだな。

遅刻したことは忘れられてるみたいだし、安心しきって生徒指導室を出ることにした。

そういえば、ここは生徒指導室だから出るときは何て言うのかな、あ！そうか。

イタズラ心が働いた。

「どうもすみませんでした。」

「…ん？何で謝る？」

「雰囲気的に……」

「なら遅刻した理由でも聞こうか？」

髭ジャ―はニヤリと笑ってこっちをチラリと見た。

「失礼しまーす」

オレは逃げるように生徒指導室を出た。余計なこと言わなきゃよかった。くそ！覚えていたか。

生徒指導室を出ると女の先生が待っていた。

「初めまして、杉村千太郎君。1―A担任の西崎さつきです。よろしくね。」

にこっ！

「…よ…よろしくお願いします」

一瞬ドキッとした。

身長は160？くらいで髪型はロング、後ろ髪を一ヶ所にまとめ縛っている。後ろ姿は地味目に見えるだろうが、正面から見たらすごい。

なんと言ったらいいか、ん…メロン。いや…スイカ！そうスイカだ！

「みんな教室で待つて…ハヒヤッ！」

ハヒヤ？…西崎先生を見たら、顔を赤くしてオレの後ろをチラチラと見ている。

後ろには髭ジャーがいるけど…ま…まさか！西崎先生…髭ジャーのことを…。

いやいやそれはないだろう…たしかに髭ジャーはイケメンとまではいかないが、ダンディという言葉がにあうけど…こんなに美人でしかも、きょ…きょ…きょに…いかん…立派なスイカをもつてらっしやるのに…。

これは確かめる必要があるな。

「西崎先生、好きなんですか？あの髭」

「え？…す…あっ！あぁっ！こ…声が大きいわよ」

髭ジャーには聞こえない程度に言ったのに先生はオレの口を手でふさいできた。

「っん！んーん！」

とっさに先生の手をどけて好きなんですね？と聞くと、コクリとうなずいた。

「誰にも言わないでね」

上目ずかいで見てこられたら堪りません。

「言いませんよ、誰にも」

「何を誰にも言わないんだ？」

髭ジャ―乱入！

厄介なことになりそうだったが。オレは西崎先生の反応を待って
みた。

「え？」

「っあ！……に……西崎先生、ど……どうなされたんですか？こ……こんなところで？」

髭ジャ―の様子がおかしいぞ、何をそんなにビビってるんだ？

その時、西崎先生の雰囲気が変わった。

「ああっ！私は用がなけりや来ちゃいけねーのかよ？ああっ？」

西崎先生は髭ジャ―の胸ぐらを掴んでメンチビームを飛ばしていた。
た。

「ベ……別にそのような意味で言ったわけではありません」

「おめーがいつまでも私のクラスのガキを返さねーから迎えに来て

「やったんじゃねーか！」

「なんだこれえー！髭ジャー完全にビビってるよ！かつあげされてるみたいだよ！」

「ってか西崎先生…だよね？」

「あまりの豹変ぶりに呆氣にとられていた。」

「だいたいてめえー！何で生徒指導室に呼ばれてんだよ？ああっ！」

「やべえ、矛先がオレにきやがった！」

「このチャンスを逃がすかと髭ジャーは」

「そ…それじゃあ私はこれで、まだ仕事も残ってますからー」

「逃げんなー！髭ジャーは早足でどっかに行ってしまった。」

「髭ジャーが姿をけしたら先生はもとにもどった。」

「……はああ、またやつちゃった。」

「オレは恐る恐る。」

「…先生って…元ヤン？」

「だ…誰にも言わないでね、てへ！」

「言いませんよ。てか言えませんよ。」

「じゃ…じゃあ、教室に行きましょか」

何かこの先生達ってキャラ濃いなー

そんなことを思いながらオレは、まだ見ぬ友人たちのいる教室に向かった。

本当は一人知り合いがいるのだが、完全スルーしてやる。

ヤマトコウノツツミ（後書）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5465y/>

オレの才能は捨てたもんじゃない。

2011年11月18日04時53分発行